

巻頭言 「木を植える」

宇野 元

ルターの言葉として有名な、キリスト者のあり方をよく表す言葉があります。あした世界の終わりがくるとしても、きょう、私はリンゴの木を植える。ちなみに、この言葉は、もとをたどれば、ルターよりさきに、アッシジのフランチェスコが語っているといわれます。そして「私」が植えるのは、ドイツ的、ルター的な「リンゴ」ではなく、イタリア的な「にんじん」であったとのこと。

フランスの作家ジャン・ジオノの『木を植えた男』（1953年）は、リンゴの木、あるいはニンジンを作る話の20世紀における翻案とみることができるでしょう。荒れ果てた場所に、風変わりな男がいた。かつて栄えた町だったが、今はほかに人はいない。厳しい絶望的な状況のなか、男は毎日、種をまく。種は発芽し、成長して、緑豊かな憩いのある環境をつくる。やがてこの場所は、ふたたび人々が集まる豊かな町になった。男がしたことを知る人は誰もいないが、男は満ち足りていた……。

聖書は、クリスマスに人として生まれ、人間として生きた神の子によって、神の深い顧み、永遠の愛を知らせます。この知らせを受けとり、信じる信仰は、私たちに新しい展望を伴う希望を与えてくれます。そしてこの希望と共に生きるよう、力強くみちびいてくれます。

個人的な困難な体験、また今の時代の困難な出来事について、なぜこのようなことが起きるのか？ 神様はどう関係しているのか？ と私たちの心は問います。この問いにたいして、神の偉大さや主権が語られるだけだとしたら、困難な状況にある心に「きょう」を生きる力をもたらさないでしょう。私たちは人生と世界の矛盾のなかでゆさぶられます。私たちの舞台である世界には、悲劇が存在する。この現実をうけとめる。この意味で、私たちの信仰は現実的なものです。目の前の現実を正視しつつ、神の愛に信頼を置きます。イエス・キリストにおいて現された神の愛に。それゆえ現実の中で、きょうできることに励みます。私たちは人間的な委託を受けています。私たち自身と、私たちと共にある人々、そして私たちを囲んでいる命ある世界をこまやかに思い、配慮する者であるように。